

二〇一五年度

二次入学試験問題

【国語】 時間 50分

【校長先生からのメッセージ】

おはようございます。ゆつくり表紙を読みながら、心を静めてください。
まもなく一時間目の「国語」の試験が始まります。
がんばってきた自分を信じ、落ち着いて問題に取り組みましょう。
あなたが、持っているすべての力を出しきることができるよう祈っています。

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は11ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。
- 3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この物語は、十八世紀のオーストリアの首都・ウィーンが舞台です。マリーは、庭師の父とともに、メスメル博士のお屋敷で暮らしています。次の文章は、マリーがメスメル博士と話をしている場面です。

「ところで、おまえのお父さんの調子はどうだい？　あまり庭に出ていないようだし、ずっと見かけないが」

マリーは積み重ねた布をていねいに置きなおし、「元氣です。ありがとうございます」と答えた。そして、しばらくふたりともだまっていた。外でスズメの声がする。「いいえ、ちがうんです。本当は、父の具合はぜんぜんよくないんです。哀しそうに、ますますふさぎこむばかりで、ときどき、わたしはどうしたらいいかわからなくなるんです」

マリーはため息をついて、やせおとろえた顔で、背筋をびんとのばした父のことを思った。父は黒い服しか着なくなった。黒いひざ丈のズボンに黒いベストに黒い上着。どれも着古して、てかてか光っている。

「庭に出ても、元氣は出ないようです。父は、すべてそのままにしておきたいと言うばかりです。あのとさのように、母がまだ生きていたときのようにと……」

マリーはだまりこんだ。すると博士はきいた。

「お父さんはよく頭痛がするのかな？　そして朝早く起きられないときは、なにかも耐えがたいなどと、言うのではないかな？」

「はい、そうです。どうしてわかるんですか？　ときどき、着替えもできなくなります」

「きつと、またお父さんに手を当ててみたほうがいいだろうね。こちらから行くよ。そうすれば、お父さんが、二階のわたしのところにこないですむからね」

布はやわらかく、いい香りがした。(注1)ブルジの用意したラベンダーの小袋のおかげだ。マリーは、ほっとした。

「もしそうしていただければ……。手を当てていただくと、いつも体調がよくなりましたから」

博士は針を小さな木の箱の、きれいなリネンの上に片付けた。

「それはよかった。そろそろ花を活気づかせるには、おまえのお父さんがいないとだめだからね。あの人の力がなくなったら、どんなことになるかわかったものじゃない」

こう言いながら、博士はていねいに箱のふたを閉めた。

「博士、ローズマリー茶は、希望がないと思うようなときにも効き目はありますか？」

「飲み方によるがね。お父さんにはとくに必要ないだろう。なぜだい？」

「たぶん、わたしが飲んだほうがいいかと。①とときどき、勇気を出せなくなってしまうんです」

と、マリーは重ねた布のへりをそろえた。「それは、その、父の具合があまりよくないときでも、まだわたしがいます。わたしは、考えて、計画して、手伝えます。でも、父はそうさせてくれないんです。父は、絶対に修道院に行け、と言って……」

「そして病人の面倒を見なさい、と言うんだね。おまえは、植物を育てるすばらしい手を持っているのに」と、メスメル博士は考えながら、付け加えた。「おまえの気持ちはわかるよ、本当に心からね。お父さんは、おまえのことをしっかり守っていたのだろう。それにおまえの望みは、少しばかり風変わりだからね」マリーは、そんなことはありません、と反論した。すると博士は、「たぶん、わたしたちは辛抱しなくてはいけないのだろうよ。不安が杞憂(注2)に終わることもあるし……」と、話しはじめたが、マリーがさえぎった。

「いいえ、不安に思っているよりも、ひどい結果になることもあります。あと数か月で修道院に入らなくてはいけません。でも、わたし、そんなこと考えられないんです」

「それまでにお父さんはきつと、別のことを考えてくれるかもしれないし、時代も変わるかもしれない。どうなるか、わからないだろう？」そう話しながら、博士は箱を次々に棚(たな)にならべていった。「イギリスには、文学に生涯(しやうがい)をささげる女性のグループがあるんだよ。とても有名になっていて、だれもが、その女性たちの話をする。本を読む女性は危険だと、人々は言って、おそれさえ感じているのだよ。そのグループは「ブルーストッキング」と呼ばれている。おまえも、ブルジに植物をイメージするような緑色の靴下(くつした)を編んでもらうといいんじゃないかな。そして女性の庭師のグループを作って、男の庭師たちをふるえあがらせるのだよ」

マリーはくちびるをかんだ。

「本気で、おっしゃっているのですか？」

博士は、マリーの肩に手をやって、隣の部屋に向かった。

「本気だとも、かなりね。このわたしも、なにもせず医者になれたわけではない。人は、自らの手で物事をつかまなくては行けないのだよ。② 認められず、つらい思いをしているのは、おまえだけではない。たとえば、この前ここにきた少年だってそうだ。会っただろう。あの子のピアノの腕前はすばらしいし、美しい音楽を作れるから、人々におそれられているのだよ。あの子は自分で曲を書いていない、と言う者までいる。父親が代わりに作曲したと言うのだ。だが、そんなことはありえない。父親もすばらしい音楽家だが、息子ほどの才能はない。しかしあの子には、大舞台でその才能をみなに知らしめる機会がないのだよ」

メスメル博士は、開いた窓のそばに行き、大きく深呼吸した。

「あの子の父親は、昨年こぞの皇女さまの婚礼の祝宴で、あの子に演奏させようとしたのだ。だが、知つてのとおり、皇女さまは、秋に天然痘で亡くなったね。あの子にとつては、人前まへに出るいいチャンスだったのだけだね。宮廷に出られれば、本物だと認められる。そういうものだ。しかし宮廷は哀しみに包まれ、あの子のことをまったく気にならなくなってしまった。そして待降節たいこうせつ（アドベント。クリスマス前の四週間）の季節になったが、盛大な演奏会は開催されなかった。おまけに、ヴォルフガング、それがあの子の名前だが、あの子自身が天然痘にかかってしまった」

「はい、あの子が教えてくれました」と、マリーはつぶやいた。

「あの子とその姉は死ぬところだった。父親の話では、熱に浮かされながらも、紙と羽根ペンをほしがり、作曲したという。おどろいたろう、な？ そうだとも。その後でふたりとも宮廷に招かれはしたが、演奏会は開かれなかった。宮廷では別の心配ごとがあつたのだ。皇帝が演奏会を望まなければ、他の者はだれも開催しようとは言わない。考えようもしないだろうよ」

博士はぼんやり壁をなでた。それは紙でできた最新流行のもので、華やかな模様がほどこされていた。しかもイギリス製だ。

「何度か貴族が演奏会を催したが……」

「それで、どうなつたのですか？」と、マリーは窓枠にもたれて、つづきをうながした。

「あの子の父親の資金が尽きた。あの家族は、子どもたちの演奏で生計をたてているからな。皇帝がメダルを授けたが、それも売ることではできないから、ほとんど価値がないのと同じ。女帝はあの子たちの頭をなでられたが、それでは腹はいっぱいにならない」

女帝に頭をなでられたら、どんな気持ちにするのだろう。マリーは、天使のようにやわらかく、ほっそりとした指を思い浮か

べた。女帝がかがんで、あの子のあごの下に手をやる。

通りでは、だれかが薪を割っているようで、斧の音と薪が落ちる音が規則的に響いていた。庭はしずかで、猫が音もなく花壇をうろついている。マリイは、植物を植え替え、いままでとはまったくちがう景觀にする計画をいくつも考えていた。その新しいアイデアを聞いた父親はぎよつとした顔をし、それについて話すことも許してくれない。マリイはくちびるをかんで、話しはじめた。

「でも、あのヴォルフガングは、男の子だし、自分の力をせいっぱい出し切ることができません。庭が音譜と休止符でできているとしたら、庭を好きなように設計することもできません」

「たしかにね。あの子の頭には、花や花壇や生垣が音楽の形で広がっているのだね。ときどき、あまりにはげしくあふれだしすぎて、あの子にはよくないかもしれないと思うほどだよ」

博士は満足そうに、新しい壁紙から絹のカーテンへ目を移した。これも最新流行のもので、中国製でりっぱなドラゴンと異国の鳥が刺繍されている。

「だが、わずかな人間しか聞かないのだったら、あの子の中で奏でられるすばらしい音楽にもなんの意味があるだろう。演奏会もないから、収入もない。ともかくなにがないにしても、金がなければ生きていけない」

「それがわたしとどんな関係があるのですか？」マリイは目を細めて、まぶしそうに庭をながめながら、つぶやいた。「この花壇の縁をかざる、くだらない花はなくしたほうがいいわ。この、曲線模様の、よそよそしい、対称的デザインだけでもいや。ここには、ゆるやかな線を描きたい。芝生をふやして、やわらかな色で整えるの……すてきなバラを植えて……」

博士がマリイの手を取った。博士の手は大きくてやわらかかった。

③「おまえも作曲していることに気づかないかい？ マリイおじょうさんは、自分の中に、だれも気づかない形や色、香りを秘めているのだよ。ほらな。どんな関係があるかって？ おまえは才能あふれる子だ。おまけにとても賢い。きつと、ヴォルフガングよりも賢いだろう。あの子は子どもっぽく気まぐれで、人をぎよつとさせるからな」

「きつと、あの子は、言葉や文章で遊んでいるんですよ。言葉にも音がありますから」

マリイははつとして口をつぐんだ。いつのまにか、あの子をかばってしまったのだろうか。

「おまえも、あの子のおもしろいと思っただろう？ たとえそれがどんなものであったとしてもな。ともかくおまえは、

あの子よりもずっと大人で、思慮深く見えるよ。おまけに洞察力もあって、辛抱強く、趣味もいい。こんなにすばらしい子はいない、と言いたくらいだよ」博士はマリーの手を力強く握った。「しかし、それを知りたがる者がいるだろうか？ いや、いないだろうな。なぜなら、自分にふさわしい仕事をする女性を想像できず、想像もしたくない者もいるからだ。あまりにやっかいだからね。そう主張する者たちは、そんなことになったら秩序が破壊されると言うのだ」

「でもそんなことはありません。わたしは風変わりな仕事をしたいと思っただけで、だからって、なにもこわれたりしません」

マリーは博士の手をほぐすと、ざらざらして色のはげた窓枠に触れた。

「たいていの人間は、そうは思わないだろうね。仕事は女性の思考を混乱させ、反抗的にすると考える。家や、夫、子どもの世話はだれがするのだ？ これまでずっと女性がしてきた。慣れないものは、不快なのだ。世の中には別の考え方もあることを知らないといけないよ」博士は、絹のカーテンの房かざりに手をやって、房の乱れを直した。

「だが、物事を互いに結び付ける可能性はある。ひよっとしたら一度できたら、次にまたつづくかもしれない。数年前までは、蒸気で動く機械は、頭のおかしな者の空想の産物だった。でもいまは、そんな機械が現実にあって、とても役立っている。ひよっとして、^④若い女性の仕事についても同じことが起きるかもしれない」

マリーは、ふと言った。

「わたしには時間がないんです、メスマル博士。いまは若いけど、すぐに年をとります。そして修道院に入ったら、この世界では居場所がなくなってしまうんです」

「確かに、それはそのとおりだね」

博士は、考え込みながら後ろに行くのと、机に向かってなにか探しはじめた。そして紙を持ってくると、マリーにそれを手渡した。

「さあ、心から思うがまま庭の絵を描いてごらん。おまえにはきつといいことだろう。庭のイメージは初めて心の中から外に解放されて息がつまることもなくなり、おまえもさらに楽しくなるだろう」

「でも……」マリーは言葉を失った。「これは高価な紙ではありませんか！」

「いい仕事には、いい紙が必要だ。同じことをヴォルフガングにも言っ、紙をあげているんだよ。ほら、鉛筆もある。きれ

いな線が書けるよ」

「まあ、鉛筆を！」

マリーは信じがたいような気持ちで、鉛筆をくるくるまわしてながめた。茶色い木できていて、芯はにぶく光っている。ときどき父親が使いかけの短くなった鉛筆をくれたが、貴重なものだったので、普段使いにはできなかった。

「スケッチは、庭でじっくり描きたいだろうと思っただよ。鉛筆なら、羽根ペンとインクよりも便利だろう」と、メスメル博士はにっこりほえんだ。そして、呼び鈴の、刺繍のほどこされたリボンを引いた。召使がやってきて、マリーをさつと見やり、灰色がかつた青色の縞模様しまもようの木綿もめんの服と、そのレースの襟えりをながめた。ともかくボンネットは洗い立てだ。ブルジがいてねいにアイロンをかけてくれた。マリーはボンネットのはじを引っぱると、きりつとした目で見返した。召使はなにも言わずに博士のほうを向くと、腰こしをかがめてお辞儀じぎをした。

「台所の者にたのんで、このおじょうさんに、ホット・チョコレートを用意してあげなさい。それに、おいしいシナモンのクッキーでもそえてあげるといいかな。あとはバナラ入り砂糖も、惜おしまずにたっぷり入れるように伝えるのだぞ」と、博士はここにこ話した。

「それで、あなたさまには？」

「トルコ・コーヒーをたのむよ。カフェ・ア・ラ・トゥルカだ。カルダモンを少しきかせて、たっぷり砂糖を入れておくれ」
こう答えると、博士はマリーのほうを向いた。「どうだろう、パン職人の親方おやぢのところのヤーコプは、明日様子を見せにくるだろうかね。やさしそうな目をした、身なりもきちんとした若者わかぢだったね」

マリーはスカートをはらって、ダンスのステップのようにお辞儀をした。いつもよりすてきな日もある。なんと幸せなことだろう。メスメル博士と話すと、なぜだか元気が出る。そしていまは、紙に鉛筆まである……ホット・チョコレートはマリーも大好きだ。とりわけ、メスメル夫人に、こわれそうなほど華奢きゃしゃな陶器とうきのカップに注いでもらうと、すばらしい。カップはすべて最新流行のもので、植物や鳥、昆虫こんちゅうがふんだんに描かれ、中身を飲み干すと、そこにかわいらしいチョウや、深紅しんくのテントウムシが現れる。よく考えてみれば、女性の庭師ていしになりたいマリーの好みにぴったりのカップだった。そうしたカップはとても高価なので、マリーが自分のものにすることはないだろう。しかし、それを使って楽しむことはできる。

「さあ、すわりなさい」

博士の言葉に、マリーはうれしくてため息をつきながら従い、両手をひざにきちんとのせた。

(ジークリート・ラウベ作 若松宣子訳『庭師の娘』)

(注1) ブルジ……メスマル博士のお屋敷の家事全体を取り仕切る女中。

(注2) 杞憂 ……する必要のない心配。取りこし苦勞。

問一 ——線部①「ときどき、勇気を出せなくなってしまうんです」とありますが、具体的に何を「勇気を出せなくなってしまう」のですか。マリーがこのように言う理由もふくめて説明しなさい。

問二 ——線部②「認められず、つらい思いをしているのは、おまえだけではない」とありますが、これはだれがどのような様子にあることを表していますか。百字以内で具体的に説明しなさい。

問三 ——線部③「おまえも作曲していることに気づかないかい？」とありますが、「おまえも作曲している」とはどのようなことですか、説明しなさい。

問四 ——線部④「若い女性の仕事についても同じことが起きるかもしれない」とありますが、「同じこと」とは具体的にどのようなことですか。百字以内で説明しなさい。

問五 マリーは、このお話の最後に、自分の将来に対してどのように考えるようになったと読み取れますか。その根きよを明らかにして説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語辞典はさまざまな情報を盛り込んでいますが、表記・意味・用法の三つは不可欠です。他にも、語源やアクセント、類義語をはじめ実に多様な情報が記され、さらに求められもしています。しかし、大きく言えば、やはり表記・意味・用法。そこに
もう一つ、文化的記述(あるいは文化史的記述)を加えたものが、国語辞典の解説の四本柱ではないか、と私は考えます。

文化的記述というのはあまり一般的な言い方でないかも知れませんが、例えば言語学者の国広哲弥先生が、言葉の意味を十分に理解するには、いわゆる語義的な意味を知っているだけでは不十分であって、言葉が指す事物がその言葉が用いられる社会ないし文化の中でどういう位置を占めているかを知ることが必要である。その点を明らかにしてくれるような記述を指して、いま「辞書の中の文化」と考えることにする。

と語られるものです(『言語生活』一九八四年四月号、「辞書の中の文化」、筑摩書房)。

先生は続けて、それは「事物と人間の係わり合い方」であると説かれ、具体的に、「動植物では、人間が利用できるか否か、人間に危害を加えるか否か」、また、人が「動植物の形や習性のどういう面に特に注意しているか」についての情報で、「主観的なもの、フィクションに属するものが多く含まれる」とされます。

また、『診断・国語辞典』(日本評論社、一九八五年刊)という本を書かれて、国語辞典に多くの提言をされた鈴木喬雄さんは、従来、花の説明となると、多くの国語辞典は、この花は何科に属しうんぬんといった植物学的な説明に終始し、国語の辞書らしい説明に欠けているように思う。……国語の辞書が花の説明をするのなら、この花は何月ごろ、どんな色の花をつけるかといった観賞的な視点と、その花と人間とのかかわり合いについて語ってほしいのである。つまり、植物学的なミクロの
みを追わず、人間サイドからのマクロ的なアプローチを忘れないでほしいのである。

と述べられました。

お二人は国語辞典に同じことを求めておられます。それは、ことばにまつわる、日本人の日々の暮らしとかがわかるイメージです。

『広辞苑』はもちろん『岩波国語辞典』にも、動植物名はたくさん載っています。それらの項目、例えば魚介類の項目の解説

には「美味」ということばが少なからず出てきます。『広辞苑』ではおよそ一〇〇あまりの魚が「美味」ということになっていきます。食べられそうな魚はほとんど「美味」なので、単に「食用になる」ということを言っているに過ぎないようにも思えるのですが、ともかく、その魚と人間生活とのかわりが知られる情報です。

また、「狐」の項には「日本では人をだますとされ、ずるいものの象徴にされてきたが」とあり、「狸」には「化けて人だまし、また、腹鼓を打つとされる」とあります。いずれも責任を負わない書き方ですが、「狐」「狸」に関する俗信・俗説の類が書かれています。これは意味ではありませんが、日本人が狐・狸について抱いてきたイメージであり、「狐」「狸」が比喩的な表現の中に現れるとき人々に喚起させるはずの像だと言えます。もとより、これは偏見であつて、狐・狸にとつては迷惑な話でしょうが、ことばが偏見や先入観に依拠して強い表現力を持つことは認めざるを得ません。

ゴリラのような動物も、一般の人で科学的に観察した方は少ないと思いますが、体が大きくて力も強そうに見えるところから、いかにも粗暴に振る舞っているように感じがちです。そこで、人を動物に譬えるのはあまり感心したことではありませんが、「ゴリラのような奴」と言えば、分別なく乱暴な行動にはしる人物ということになるでしょう。しかし、ゴリラに詳しい人に言わせると、ゴリラは実に繊細でデリケートな動物だということです。恐らく、それは正しい見解だと私は思います。それでも、「ゴリラのような奴」が「繊細でデリケート」であることの形容となることは、まずないでしょう。辞書が偏見や誤解に基づく俗説を記述するとき、必ず読者から抗議が寄せられます。辞書が間違つたことを書いてよいのか、という叱責です。それに対しては、

① 科学的な正確さとはことばの意味における正しさとは必ずしも一致するものでない、とお答えする他ありません。

ある事物が私たちの暮らしの中でどのような位置を占め、私たちはその事物をどのようなものとして捉えているか。その事物を指すことばの意味とは、その事物の文化的なあり方と切り離して考えることができせん。ここで言う「文化」とは「生活」ということとほとんど同義です。その事物を指すことばが国語辞典に載せてあるということ自体が、すでに一つの判断を表しています。そのことばが生活の中でそれだけの意味をもって存在してきたという認定です。項目が適切に選定された日本語の辞典は、その全体が日本の文化を具現している、私はそのように考えています。

そうした事物が時代とともに身の回りから消えてしまうことがあります。それを指すことばは耳遠くなり、イメージを喚起する力を失います。つい最近まで普通に使っていたように思われる道具の類でも、気付いてみれば目にしないものが少なくありま

せん。「蚊帳」「火鉢」を見ません。「火鉢」がなければ「五徳」も使いません。ある年代の人に懐かしいだけです。「洗濯板」を使う場面が減った結果、「洗濯板のよう」という比喻表現が何を表すか、それを辞書は記述しなくてはならないでしょう。

食材の旬もあいまいなものになってきました。「秋刀魚」などは格別のイメージを喚起する魚ですが、七輪でぼうぼうと出る煙に苦戦しながら塩焼きにするという風物詩は、特別の催し以外には、見るものが少なくなりました。分量の点からどこまで書けるかには制約が伴うでしょうが、「海産の硬骨魚。全長四〇センチメートル。」に終わらない、^② 文化的記述を盛り込む努力は、国語辞典編集者が是非とも心すべきことだと思います。

（増井元『辞書の仕事』）

問一 —— 線部① 「科学的な正確さのことばの意味における正しさとは必ずしも一致するものでない」ということを、本文中のゴリラの例を使って具体的に説明しなさい。

問二 —— 線部② 「文化的記述を盛り込む努力は、国語辞典編集者が是非とも心すべきことだと思います」とありますが、「文化的記述を盛り込む」利点はどのようなことですか、説明しなさい。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 母校のエンカクを調べる。
- (2) 期待にコタえる。
- (3) 疑うヨチがない。
- (4) この言葉は父のザユウの銘だ。
- (5) コウメイ正大な人物。

受験番号
氏名

得点

問一

------	------	------

問二

-----	-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----	-----

問三

------	------

問四

-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----

問五

------	------

問一

------	------	------	------

問二

------	------	------	------

問一

(1)
(2)
(3)
(4)
(5)

この中には何も書かないこと

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧
